



高台からまちを見つめる浜登文寿さん。両親の思いを胸に刻み、地域医療を担う医師としての思いを強くする＝11日、釜石市鵜住居町

釜石のクリニック院長 浜登さん

父母思い 医療支える

東日本大震災で両親を失った釜石市鵜住居町うのすまいのはまはと神経内科クリニック院長、浜登文寿さんはまど（55）は11日、復興途上のまちで犠牲者を悼み、地域医療への思いを強くした。「医師の少ない地域のために」と開業した浜登さんを後押ししてくれた父と母。自然災害や新型コロナウイルスなど不安を抱える人が増える中、「患者に、地域に寄り添い続けたい」と鵜住居と共に歩み続ける。

「きょうの風は特別だな」。激しい風を受け、つぶやいた。新たな住家や施設が増え、高台から見える景色は変わった。

あの日。揺れの後、海から約1キロにあった医院から患者やスタッフらと高台に避難した。途中で鵜住居小と釜石東中の児童生徒と一緒にになった。「もつと上に」。地域住民の声でさらに高い場所を目指した。

確保し、地域を回った。山田町境田町に暮らす父かずお五夫さん（当時82）と母ナヲさん（当時79）が津波にのめられたと知ったのは数日後だった。

医師は電器店を営んだ父が憧れた職業だった。「子どもに夢を託した部分はあったと思う」。県立宮古病院勤務などを経て2002年、同市鵜住居町に開業。当時、県立釜石病院に神経内科の常勤医がおらず、父は「沿岸地域のために」と背中を押し、母も思いを尊重してくれた。

悲しみを抱えながら、3月下旬には市内の廃院で診療を再開。10月には市が鵜住居地区に開いた仮設診療所に入った。昨年9月、高台の小中学校の近くに医院を再建。神棚と待合室の筋交いには父が山田町で育てたスギ材を活用した。

最近では将来への不安を抱えている患者も増えた。そんな時だからこそ、手を取り合って命を守った9年前の子どもたちの姿を思い起こす。「手を携え、寄り添う。『支える医療』のため、支援者や両親の思いに応えていきたい」